

# 批判を超えて

# 「変化の本質」を見据えたい

代々木ゼミライセンスクールで昨年10月に開講した「日本語検定<sup>®</sup>で学ぶ！日本語力アップ教室」。オリジナルテスト解説動画で日本語の知識と正しい使い方を学ぶことができると好評だ。講師を務めるのはカリスマ国語講師で、代々木ゼミナール教育総合研究所主幹研究員の船口明先生。リアルな日本語教育の現状を知る船口先生に、「2020年度より実施される大学入学共通テスト（新テスト・以下同）でどう変わるのか」について伺った。



代々木ゼミナール教育総合研究所  
主幹研究員 船口 明 氏

## 日本語力・文章力を鍛えるのが 新テストの大きなテーマ

新テストの問題形式ばかりが注視される傾向にあるが、船口先生は、“なぜ、新テストに変える必要があるのか”、新テストの意義を重要視すべきだと強調する。

「今や子供たちの『日本語力・文章力』は危機的状況です。文章がきちんと書けない高校生が多い。ところが、彼らは『人類史上最も、書かれた文章でコミュニケーションする時代』を生きていかねばならない。メールでのやり取り、WEB上でのコミュニケーションなど、社会に出ると、自身の日本語・文章力の無さを痛感することになります。ましてや大学生は『論文』を書くのが目標です。今、多くの大学は一年生に基本的な文章指導をしている。最終的には英語論文が必要な場合も多いのに、その土台となる日本語の文章が全く書けないからです。本来、文章指導は高校で教えることになっているのですが、そこに十分な時間が割かれていない現状がある。高校教育の肩代わりを大学がしているわけです。これでは大学の負担が大きすぎます。高校生のうちに基本となる日本語力・文章力をつけてもらいたい。そのためには高校国語での学びに変化が必要になる。とはいえ現場は変わらない。現場を動かすのに最も効果的な方法は何か。それが『テストを変える』という方法だったのではないのでしょうか」

## 表面的な「記述式対策」「実用文対策」ではなく 変化の本質を見据えた学びを

日本語力が不可欠な新テスト。これまでの問題と大きく異なるのは、記述式問題が課される点に加えて、実用文や資料の読み取りが出題される点だ。

「新テストの試行調査問題では、“実用文と資料の読み取り”が出題されています。これらは、実はこれまでの高校教科書にも掲載されているのですが、多くの現場ではスルーされてきた。“わざわざ教えなくても生徒たちは読めるだろう。国語教育の意義はもっと違うところにある”という理解です。ところが入試に出ることになった。生徒に解かせてみると意外とできない。そこで“実用文と資料の読み取り”が極端にクローズアップされているのですが、先にも述べたように、記述式を出題する背景にあるのは“論文力”を向上させること。探求学習の意義とも繋がるものです。紙幅の関係上個別の問題の詳述はできませんが、単に“記述式が出る”“実用文と資料の読み取りが出る”といった表面的な理解にとどまらず、“論拠に基づいて自分の考えをまとめる”“論拠として客観的なエビデンス（出典を明示し文章や図表を引用する）を提示する”などの本質的な学びを意識して欲しいと思います」

記述式の出題によって、書く力をつけるさせることを意識した学びに変わっていく。書くのが苦手な学生の文章にはいくつかの特徴が見られる、と船口先生は話す。

「例えば、一意に定まる文が書けない。自分が伝えたいことと異なる意味で相手に伝わってしまうような文を書いてしまう。ある大学の先生が、自分の授業内容が学生に伝わっているか不安になり、授業内容の要旨を書かせたところまるで書けない。やはり理解してなかったのだと、試しに授業の内容をしゃべらせるところ、一転して正確に授業の内容を話した。その先生は、低下していたのは聞く能力ではなく、書く能力だったことを実感したそうですが、聞き取ったことを文字化できない学生は多い。読点の打ち方もそうです。たとえば、“サザエさんがお魚をくわえて逃げるネコを追いかけた”という例文があるとします。読点は文意を区切るものですから、正解は“サザエさんが、お魚をくわえて逃げるネコを追いかけた”。ところが、読点の働きを意識して書く習慣がないので、“サザエさんが、お魚をくわえて、逃げるネコを追いかけた”と書いてしまう。これでは“お魚をくわえているのはサザエさん”。そのことに気づかない。短文でも共通テストで記述式を必須化すれば、指導の時にこういう点にまで気を配るようになるのではないのでしょうか。」

### 日本語検定で

#### 日本語力の土台を形成する

根本的な日本語力を高めるとすることで、日本語検定は有効だと船口先生は話す。

「日本語検定は、文法・敬語に始まり図表の読み取りまで、日本語の総合力が求められる検定です。新テストに限らず、将来必要となる学力として、日本語検定を通じて言語運用を磨くことは、非常に意味のあることだと思います。大学で、さらに社会で、日本語力が子供たちのポジションを左右するといっても過言ではありません。それだけに日本語の総合力をはかる日本語検定の役割は大きい。今後は、特に言葉が活発に形成される幼児期や低学年にも目を向け、言語意識をもたせる裾野の広い取り組みを期待しています」